特集・外国人に開かれた都市を目指して❻

◎外国人ではなくて隣人

■関山　誠

1　外国人という意識ーアメリカと日本の差
2　多様性の中での外国人
3　意識されない二つの特別な社会
4　コミュニティの中での外国人
5　外国あるいは国際という壁

1　外国人という意識ーアメリカと日本の差

今年、アメリカで最大のイベントは大統領選挙。確かにオリンピックもあり私も実は楽しみにしているが、所詮それは七月の二週間だけのこと。それに引き換え大統領選挙は、二月に始まった各候補者を絞り込む予備選挙や党員集会から十一月の一般選挙まで、ほぼ一年に及ぶ。新聞やテレビのニュースに食い入る毎日が続いている。そんな折、民主党全国委員会から一通の封書が届いた。開けてみると、やはりクリントン大統領の政策を問うアンケートと党員への勧誘だ。以前にも地元選出の共和党下院議員からアンケートがあったのをはじめ、赴任一年後あたりから同様のものが何回も送られてきていたので見当がついたのだ。「しかしなぜ選挙権のない私に」という疑問を最初は感じたが、考えてみればいろいろな人種や民族の人々が住むアメリカだ。外国人を名前だけで識別するのが難しいのかもしれない。いや、そうではなくむしろ、そこに住む人を必要な場合以外、外国人として区別する意識が存在しないかもしれない。「実際に選挙はできなくても、あなたも居住者として意見を述べる資格がある」と言われているのだ、と思うようになった。

こういうところから日本を見ていて思うことが二つある。まず、日常生活の中でさえ、「外国」とか「国際」という言葉を使うことによって、内と外、日本人とそれ以外の人々をはっきり分けて考えてはいないかということ。私たちが「日本人」という場合、「日本列島に住む単一の民族」や、「日本語という単一の言葉を使う人々」など、単純な条件設定で、かつ排他的に「自分たちの属するグループ」を思い描いているのではないか。そして、それ以外が「外国人」。自分たちの領域外の「外国」という意識が、そういう「外国人」たちとの関係をつくりあげてしまう。単に言葉や文化が違うだけの人同士の関係を「国際交流」というように。本来は、国という壁など意識しない一人の人と人との関係、互いの考えやその文化的な背景を共有することであるはずなのに。また二つ目として、そうした観念の中で生活している私たちは、外国人に対して特別の意識をもっているようだ。慣れていないということ、つまり「あまりかかわりたくない」か、かかわるとすれば「何か特別なことをしてあげなければならない」と思っていること。それから、自分たちの周りに外国人が増えるであろうことを覚悟できていないということである。

これとは全く逆の境遇を私は今ここで感じている。私の仕事の場であるニューヨークでは、私は単にそこで働いている人。日本人であることにそんなに大きな意味はないし、まして外国人として意識されることはない。暮らしの場であるコネティカット州グリニッチでは、そこに住んでいる人たちにとって私たち家族は隣人である。「外国人」としてよりもまず「隣人」として扱われる。

この大きなギャップについて考えたい。歴史や環境の違いがあるので、日本において今すぐに、外国人を特別に意識しないようにしようといっても無理があることはもちろん分

かっている。そして日本人と外国人を厳然と区別する法制度が存在することも理解している。しかし、少なくとも「外国人」ということの前に「隣人」として考えてみることはできると思う。また、そうした隣人が増えることは、高度に産業化した日本、特に横浜のような大都市では必然であって、それによって日本人も多様性を許容しなければならなくなるという覚悟をする必要があると思う。

2 多様性の中での外国人

「アメリカはこうだ」と私が自信をもって言い切れるのは「多様性の国」ということだ。さまざまな人種や民族によって構成され、多くの言語が使われ、それぞれの文化が表現され、多様な宗教が存在する。富める者とそうでない者との格差は大きいし、地域による違いも千差万別。

ここではまず、「アメリカ人の多様性」を見ることによって、アメリカにおける外国人の環境を全般的に考えてみたい。

一九九五年の商務省国勢調査局の報告は、現在の「アメリカ人」について次のとおり表現している。一応解釈は付けるが、原文からそのニュアンスを感じ取ってほしい。

□We're more racially and ethnically diverse.(人種・民族が一層多様化している)

□Newcomers arrive every day.
(移民が大きな要素となっている)

□We speak with many voices.
(多くの言語が話されている)

❶―人種・民族の多様性

「アメリカ人」という時、それを一言で表現することはまずできない。いろいろな人たちが、それこそ世界中からやって来た人たちがアメリカ人を構成しているからだ。また、その多様化が進んでいる(表―1)。

❷―移民社会

アメリカはメイフラワー号以来移民の国である。今世紀に入って一九九〇年までに、三千八百万人の移民が入国した。この結果、一九九〇年の全人口二億四千九百万人の内二千万人、八%がアメリカ以外の生まれとなった。

また一九九二年には、九七・四万人の移民の内一一・七万人が難民法に基づくものであった。さらに、抽選により永住権を与えるという制度もある。移民実績の少ない国を対象に年間五万五千人に永住権申請資格を与えている。昨年は三百六十八人の日本人も当選した。今年も地域別に、ヨーロッパ二万三千九百十人、アフリカ二万六百二十三人、アジア七千百八十七人などの募集枠が発表されている。こうした政策にアメリカの理念を見ることができる。

❸―多言語環境

一九九〇年の五歳以上の人口の内、英語以外の言語を家庭で話す人は三千百八十万人、一四%だった。その五四%がスペイン語を話す人たちで、フランス語(五・三%)、ドイツ語(四・九%)、イタリア語(四・一%)、中国語(三・九%)と続く。また、その人たちの内四四%が英語をあまりよく話さないという数字もある。

以上が現代アメリカ人の概括的な姿だ。冒頭の「外国人を識別できない」、あるいは「区別しない」根本がまさにここにあるといえる。全般的にとらえた場合の、アメリカにおける外国人の環境―多様性の中にいる外国人―を理解してもらえると思う。

3 意識されない二つの特別な社会

アメリカはいうまでもなく広い国だ。今述べたばかりの外国人の環境も、細かく見ていけば当てはまらない所もあるかもしれない。ただ、外国人が多く働き、住む場所はある程度限られている。例えば、ニューヨーク大都市圏には領事館に在留届けをしている日本人が五万人おり、これは全米最大だ。この大都市圏の中には、もちろん私の仕事の場であるニューヨークと、暮らしの場であるグリニッチも含まれている。そして両方とも、やはり外国人が「意識されない」環境だ。

❶―コスモポリタンシティ――ニューヨーク

移民として入国した人達の多くは、仕事を求めて大都市に集まってくる。一九九四年には八十万人の移民があったが、その七割近くがカリフォルニア、ニューヨーク、フロリダ、テキサス、ニュージャージー、イリノイの六州に居住した。また、三七%、三十万人が、ニューヨーク大都市圏をはじめ、この六州を中心とする表―2の大都市圏に集中する。

その上ニューヨークは世界で最もビジネス

表―1 人種・民族上の構成割合

	1995 人口(百万人)	1995 (%)	1980 (%)
White(non-Hispanic)	193.3	74	80
Black	33.0	13	12
American Indian／Eskimo／Aleut	2.2	1	1
Asian or Pacific Islander	9.2	4	2
Hispanic origin	26.8	10	6

出典：商務省国勢調査局
＊分類については，回答者が自分自身で選択した結果。
＊Hispanicとは，概ねカリブ海，メキシコ以南のスペイン語を話す地域から来た人たちとその子供で，いくつかの人種で構成される。

表―2 移民の大都市圏定住意向(1994)

	人数	移民全体に占める割合(%)
ニューヨーク	124,423	15.5
ロサンゼルス	77,112	9.6
シカゴ	40,081	5.0
マイアミ	29,108	3.6
ワシントン特別区	25,021	3.1
計	295,745	36.8

出典：司法省移民帰化局

が集積する都市。私たちのような駐在員の存在がその多様性に一層拍車をかけている。この結果、「外国人として意識されることがない」と先に述べたニューヨークの状況が現出する。それはまさに、世界のさまざまな所からやって来た多くの人たちが創るコスモポリタンシティであろう。一九九〇年には、ニューヨーク市人口の二八％以上が外国生まれとなった。逆説的だが、こういうニューヨークを最早アメリカではないという人たちも結構いる（表―3）。

なお、こうした環境の中では、行政など公による外国人のための制度やサービスはまず見出せない。後に述べる移民のためのＥＳＬと、旅行者向けのパンフレットが関係すると思われるくらいだ。むしろ同胞・同系の社会において、ボランティアとして行われているか、ビジネスとして成り立っている事例が多いと思われる。

❷―確立されたコミュニティ――グリニッチ

コネティカット州グリニッチは、ニューヨークから北東に四十五キロ、列車で四十五分ほどの所にある町。横浜の新四区を合わせたよりも少し広い百二十五平方キロにほぼ六万人が住んでいる。一六四〇年に開拓者が、先住民の人々から土地を買ったことに始まるアメリカでは最も歴史のある町の一つだが、現在はニューヨークに仕事を持つ人たちのベットタウンになっている。とはいっても、宅地の区画に町の厳しい規制が働いているため、人口が急増することはあり得ない。戸数は一万五千八百といわれ、その殆どが一戸建てでかなりのゆとりがあるといえる。

また、所得が高いこともこの町の特徴の一つである。全米で平均所得が最も高いコネティカット州の中でも、最も高いレベルの平均所得を示す。これが財政状況に反映されているのか、公共施設も大変よく整っている。別に豪華な文化ホールなどがあるわけではなく、町民専用のビーチ、テニスコート、ゴルフ場、それに自然豊かな公園といったものだ。

私は、このグリニッチに確立されたコミュニティを感じている。それは日本で考えていた「コミュニティ」とは何か違うようだ。このコミュニティには、明確な意思とそこに住む人＝町民共通の目的が存在する。コミュニティの環境や安全は自分たちで守るという意思。また良好な環境や安全な状態によって、コミュニティのステータスを維持し、自分たちの財産を維持するという目的だ。そしてこの意思と目的の実行は、納税という一種の契約関係によって町政府に委任されている。ただし町政府が代行する仕事にも限りがあるので、必要があれば、町民も個々人の自発的な意志でコミュニティを支える仕事に協力、参加する。つまり、「自分たちのコミュニティは自分たちで守る」という、共通ではあるが本は個々人の基本的な権利主張に由来する意思、そしてその発露としてのボランティアがこのコミュニティを確かなものにしているように思う。私はこの辺りがコミュニティやボランティアの本質ではないかと考えている。

昨年、先に記した町民専用のビーチをめぐって訴訟が起こされた。隣町に住む学生が、このビーチへの立ち入りを断られたのをきっかけに、「海辺は万人のもの」としてその一般開放を求めたものだ。しかし、そこは町が五十年前に購入して以来、町が独自に管理、運営し、町民に開放している。一九九二年のハリケーンで一帯が大被害を蒙った時も、連邦と州政府の資金支援を断り、町の財政と町民の協力で復旧費をまかなったそうだ。そして毎年十五ドルという使用料も町民は納得して負担している。訴訟は継続中だが、町と町民の「今のよい環境を保つためには自分たちで守る」意思は固い。閉鎖的に映るかもしれないが、私もこれに心底同調するものがある。

この環境の中で、私たちはやはり「外国人」と意識されずに暮らしている。もしかしたら多少は意識されているのかもしれないが、何よりも「隣人」として受け入れられているという実感が大きい。それは、ニューヨークで「意識されない」のとは違って、私たちをコミュニティに迎え入れ、私たちをコミュニティの一員にしていこうというグリニッチの人たちの自然な考え方と行動によるものだと思う。もちろん外国人が身近にいて当然という認識が前提ではあるが、こうした確立されたコミュニティでこそ外国人も自然に暮らしていけるのではないか。

4―コミュニティの中での外国人

私の八歳になる息子理一は、グリニッチの公立小学校に通っている。この小学校を含めてグリニッチには、小・中・高合わせて九つの公立学校がある。児童・生徒の数は、全部で約七千人。その中には、主に英語以外の言

写真―1　小学校も多様性社会の一例。理一（右端のクラスで）

表―3　ニューヨーク市の人種・民族上の構成割合（1990）

	人口(千人)	(%)	全米(%)
White	3,163	43.2	74
Black	1,847	25.2	13
Hispanic origin	1,784	24.4	10
Asian or Pacific Islander	490	6.7	4
American Indian／Eskimo／Aleut	18	0.2	1
外国生まれ	2,083	28.4	8
計	7,323		

出典：商務省国勢調査局
＊分類については,回答者が自分自身で選択した結果。
＊全米の人種・民族構成は1995年。

語を話す子たちが一六％含まれていて、その数は三十九言語になるという。十年前には一一％だったというから、年々増える傾向にあるようだ（写真－1）。こういう子たちのために、すべての公立学校でESL（English as a Second Language）が提供されている。理一も当初からこのサービスを受けた。自分のクラスが、通常の読み・書きの授業を行っている時に、ESLの子だけ集められ、会話の初歩から丁寧に教えてくれる。もちろん、永住権を持っていて、これからずっとアメリカで生活していこうという子たちが主流で、本来そのためのものであることは間違いない。生活していくのに一番大切な手段を身につけさせようというものだ。こういうサービスに私たち駐在員の子弟も分け隔てなく受け入れられている。ただ、理一は二年ほどで修了して、今はネイティブの子たちといっしょに通常の授業を受けているが、ESLを終えないうちに帰国してしまう子たちもいるとのこと。現にかつて、私たちのように何年か後に必ず帰ってしまう家族、特に早く帰国する傾向にある日本人駐在員の子弟にESLを受けさせる必要があるのか、という議論があったそうだ。幸い結果的には、一時的にしろ同じコミュニティに暮らすものとして受け入れられている。

ESLは町によって大人向けのものも行われているが、これも本来外国人のためのサービスとはいえない。その他にも外国人のための特別の制度やサービスはグリニッチにも見当たらない。この点でも外国人は特に意識、区別されることはない。例えば、町の図書館にNewcomers Community Answersという、生活を始めるにあたって必要な情報を提供するコーナーがあるが、これは外国人だけではなく、新しく引っ越して来た人のために設けられている。

このように、外国人のために特別のことが行われていなくても、特に不便を感じることはない。試しに、私同様駐在員としてスペインから来ていて、同じ町に住む家族にこのことを聞いてみたが、やはり不便は感じていない様子。むしろ「外国人のために特別な」ということ自体不思議に感じたようだった。それは、私たちもそうだが、「隣人」として普通に扱われ、実際に「隣人」と付き合う中で、多くの困難も解決されていったからだと思う。特に親しくしている家族－彼らも何代か前にアイルランドからやって来た人たちの子孫だが－には、言語や教育、生活の細々したことから、余暇をいっしょに過ごすことなどまで、あらゆることで家族ぐるみ助けられている。今では、私は町の子供サッカー教室で、妻の祐子は小学校で、それぞれボランティアに参加しているくらいなので、一応このコミュニティの一員になれたのではないかと感じている（写真－2、3）。

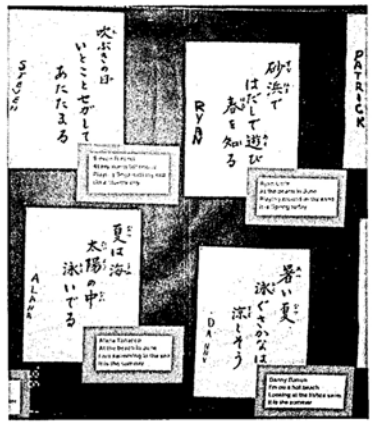
5 外国あるいは国際という壁

ニューヨーク郊外に暮らす日本の女性たちが、その経験を綴った文集がある。生活に基づくさまざまな面で、日米の比較がなされるなど、日本人の考え方、感じ方をアメリカの人たちに知ってもらい、そしてもしかしたら理解してもらうのにとても役立つものだと思う。ただその中に、一カ所気になるところがあった。巻頭の各執筆者へのアンケートの中に、「もし気軽に参加できる月に一回程度の国際交流の場があったとしたら、参加してみたいと思いますか」という問があり、七四％の人が「はい」と答えているのである。私は何か奇妙な感じを覚えた。

「今そこにいて、なんで国際交流の場が必要なんですか。人と人とのつきあいに、またその中でお互いの考えを共有したり、文化的な刺激を得たいと思う時に、なぜ国際なんですか。多分そういう時に相手の『外国人』は、あなたを日本そのものとは思っていない。国と国の結び付きというような、そんな大げさなものではなくて、あなたと今そこにいる人が話をしたり、同じ一つのことを一緒にするだけのことではないですか」というようなことを感じた。もちろん問う人もそんなに深く考えていないのかもしれないが。ただそこはやはり、「国際」という言葉を使う時の壁、今ここに住んでいるのに自分たち以外を「外国人」にしてしまうような壁を感じる。

横浜が「外国人に開かれた都市」を目指すとき、私はいくつかのことを頭においておきたいと思う。身近に外国人が増えることは、横浜のような高度に産業化した都市にあっては必然であること。それによって、日常レベルで多様性を許容しなければならなくなること。その時、「外国」や「国際」という言葉を使っていては理解不能になること。そして、「外国人ではなくて隣人」という環境を醸し出すコミュニティについては、その在り方と大切さを今ここでもっと吸収しておきたい。

〈経済局ニューヨーク事務所副所長〉



写真－2
異文化を共有する試み。
理一のクラスでは、俳句のリズムを用いた詩（もちろん英語）の創作を行った。日本語訳とその清書は、祐子が協力。

写真－3
地元紙に載った神戸地震の時の支援活動。左端が祐子。